

瀧口入道

高山樗牛



はじめに

高山樗牛による『瀧口入道』は、平家物語に材をとつたもので、文語の美文として広く知られています。本大活字本シリーズでは、より大きめの字で収録し、いつそう読みやすくしました。

高山樗牛『瀧口入道』について

※ウィキペディアより

【解説】

『瀧口入道』（たきぐちにゆうどう）は、高山樗牛が1894年に書いた小説。樗牛にとって処女作であり代表作であり、また唯一の小説である。

【あらすじ】

時は平家全盛の時代。時の権力者平清盛は、わが世の春を謳歌していた。ある日清盛は、西八条殿で花見の宴を催した。ここに平重盛（清盛の息子）の部下で滝口武者の斉藤時頼もこれに参加していた。このとき宴の余興として、建礼門院（重盛の妹）に仕えていた横笛が舞を披露した。それを見た時頼は横笛の美しさ、舞の見事さに一目惚れしてしまった。

その夜から横笛のことが忘れられない時頼は、恋しい自分の気持ちに横笛に伝えるべく、文を送ることにした。数多の男たちから求愛される横笛であつたが、無骨ながら愛情溢れる時頼の文に心奪われ、愛を受け入れることに。しかし、時頼の父はこの身分違いの恋愛を許さなかつた。傷ついた時頼は、横笛には伝えずに出家することを決意した。嵯峨の往生院に入り滝口入道と名乗り、横笛への未練を断ち切るために仏道修行に入った。

これを知つた横笛は、時頼を探しにあちこちの寺を尋ね歩く。ある日の夕暮れ、嵯峨の地で、時頼の念誦の声を耳にする。時頼に会いたい一心の横笛だが、時頼は

「会うは修行の妨げなり」と涙しながら帰した。滝口入道は、横笛にこれからも尋ねてこられては修行の妨げとなるかと、女人禁制の高野山静浄院へ居を移す。それを知った横笛は、悲しみのあまり病に伏せ亡くなった。横笛の死を聞いた滝口入道は、ますます仏道修行に励み、その後高野聖となった。

# 瀧口入道

# 第一

やがて來む壽永の秋の哀れ、治承の春の樂みに知る由もなく、六歳の後に昔の夢を辿りて、直衣の袖を絞りし人々には、今宵の歡會も中々に忘られぬ思寢の涙なるべし。

驕る平家を盛りの櫻に比べてか、散りての後の哀れは思はず、入道相國が花見の宴とて、六十餘州の春を一夕の臺に集めて都西八條の邸宅。君ならでは人にして人に非ずと唱はれし一門の公達、宗徒の人々は言ふも更なり、華胄攝籙の子弟の、苟も武門の蔭を覆ひに當世の榮華に



誇らんずる輩やからは、今日けふを晴はれにと裝飾よそほひて綺羅星きらほしの如く連つらな  
りたる有様こうりやうゑんぐわ、燦然さんぜんとして眩まほゆき許ばかり、さしも善美ぜんびを盡つくせる  
虹梁こうりやうゑんぐわ鴛瓦いしだぐみの砌かげうすも影薄かげうすげにぞ見えし。あはれ此程このほどまでは  
殿上てんじやうの交まじはりをだに嫌きらはれし人の子、家の族やから、今は  
紫緋しひもんりやう紋綾もんしよくに禁色きんじきを猥みだりにして、をさくく傍若無人ぼうじやくにんの振舞ふるまひあ  
るを見ても、眉ひそを顰ひそむる人だに絶たえてなく、夫れさへあ  
るに衣袍いはうの紋色もんしよく、烏帽子うぼうしのため様やうまで萬六波羅よろろくはらやう様をまね  
びて時知り顔ときしりかほなる、世は愈々いよいよ平家の世と覺おぼえたり。  
見渡せば正面かむらにしきに唐錦からにしきの茵しんねを敷しける上に、沈香ぢんかうの脇息けふそくに  
身みを持たせ、解脱げだつどうさう同相どうさうの三衣さんえの下したに天魔てんまはじゆん波旬はじゆんの慾情よくじやうを去す  
りやらず、一門いっもんの榮華えいげを三世いっせいの命いのちとせる入道にゅうだう清盛せいせい、さて

も鷹揚おうえうに坐せる其の傍には、嫡子ちやくし小松の内大臣重盛卿、  
次男中納言宗盛、三位中將知盛とももりを初めとして、同族の公  
卿十餘人、殿上三十餘人、其他、衛府諸司數十人、平家  
の一族を擧げて世には又人なくぞ見られける。時の帝みかどの  
中宮ちゆうぐう、後に建禮門院と申せしは、入道が第四の女むすめなりし  
かば、此夜の盛宴に漏れ給はず、冊かしうける女房曹司にようぼうざうしは皆々  
晴の衣裳に奇羅を競ひ、六宮りくきゆうの粉黛ふんたい何れ劣らず粧よそほひを凝こら  
して、花にはあらで得ならぬ匂ひ、そよ吹く風かぜごと毎に素袍すほう  
の袖を掠かすむれば、末座なに並み居る若侍等わかざむひのひたちの亂れもせぬ衣  
髪をつくろふも可笑をかし。時は是れ陽春三月の暮、青海せいかいの  
簾高く捲き上げて、前に廣庭を眺むる大弘間、咲きも殘

らず散りも初めず、欄干近く雲かと紛ふ満朶の櫻、今を  
盛りに匂ふ様に、月さへ懸りて夢の如き圓なる影、臙に  
照り渡りて、満庭の風色碧紗に包まれたらん如く、一刻  
千金も畜ならず。内には遠侍のあなたより、遙か對屋に  
沿うて樓上樓下を照せる銀燭の光、錦繡の戸帳、龍鬢の  
板疊に輝きて、さしも廣大なる西八條の館に光到らぬ隈  
もなし。あはれ昔にありきてふ、金谷園裏の春の夕も、  
よも是には過ぎじとぞ思はれける。

饗宴の盛大善美を盡せることは言ふも愚なり、庭前に  
は錦の幔幕を張りて舞臺を設け、管絃鼓箏の響は興を助  
けて短き春の夜の闌くるを知らず、豫て召し置かれたる

白拍子の舞もはや終りし頃ほひ、さと帛を裂くが如き四  
絃一撥の琴の音に連れて、繁絃急管のしらべ洋々として  
響き互れば、堂上堂下俄に動搖めきて、『あれこそは隠  
れもなき四位の少將殿よ』、『して此方なる壯年は』、  
『あれこそは小松殿の御内に花と歌はれし重景殿よ』な  
ど、女房共の罵り合ふ聲々に、人々等しく樂屋の方を振  
向けば、右の方より薄紅の素袍に右の袖を肩脱ぎ、螺鈿  
の細太刀に紺地の水の紋の平緒を下げ、白綾の水干、  
櫻萌黄の衣に山吹色の下襲、背には胡籛を解きて老掛を  
懸け、露のまゝなる櫻かざして立たれたる四位の少將  
維盛卿。御年辛く二十二、青絲の髪、紅玉の膚、平門第

一の美男びなんとて、かざす櫻も色失いろうせて、何れを花、何れを  
人と分たざりけり。左の方よりは足助あすけの二郎重景とて、  
小松殿恩顧さむらいびの侍さむらいなるが、維盛卿より弱わかきこと二歳にて、  
今年方まさはに二十はたちの壯年わかもの、上下同じ素絹そけんの水干の下に燃ゆる  
が如き緋あかの下袍したぎを見せ、厚塗あつぬりの立烏帽子たちからざりに平塵ひらぢりの細鞆こまな  
るを佩はき、袂ゆたか豊ゆたかに舞ひ出でたる有様、宛然さながら一幅の畫圖と  
も見るべかりけり。二人共に何れ劣らぬ優美の姿、適怨  
清和、曲きよくに随つて一絲も亂れぬ歩武の節、首尾能く  
青海波せいがいはをぞ舞ひ納めける。満座の人々感に堪へざるはな  
く、中宮ちゆうぐうよりは殊に女房にようばうを使つかひ纏頭ひきでものの御衣おんぞを懸けられけ  
れば、二人は面目めんもく身に餘りて退まかり出でぬ。跡あとにて口善惡くちさが

なき女房共は、少將殿こそ深山木の中の楊梅、足助殿こそ枯野の小松、何れ花も實も有る武士よなどと言ひ合へりける。知るも知らぬも羨まぬはなきに、父なる卿の眼前に此を見て如何許り嬉しく思い給ふらんと、人々上座の方を打ち見やれば、入道相國の然も喜ばしげなる笑顔に引換へて、小松殿は差し俯きて人に面を見らるゝを懶げに見え給ふぞ訝しき。

## 第二

西八條殿の搖ぐ計りの喝采を跡にして、維盛・重景の

退り出でし後に一個の少女こそ顯はれたれ。是ぞ此夜の  
舞の納めと聞えければ、人々眸を凝らして之を見れば、  
年齒は十六七、精好の緋の袴ふみしだき、柳裏の五衣打  
ち重ね、丈にも餘る緑の黒髪後にゆりかけたる様は、舞  
子白拍子の媚態あるには似で、閑雅に藹長たけて見えに  
ける。一曲舞ひ納む春鶯囀、細きは珊瑚を碎く一雨の曲、  
風に靡けるさゝがにの絲軽く、太きは瀧津瀬の鳴り渡る  
千萬の聲、落葉の蔭に村雨の響重し。綾羅の袂ゆたかに  
翻るは花に休める女蝶の翼か、蓮歩の節急なるは蜻蛉の  
水に點ずるに似たり。折らば落ちん萩の露、拾はば消え  
ん玉篠の、あはれにも亦婉やかなる其の姿。見る人惘然

として酔へるが如く、布衣ほいに立烏帽子たちくわぼうしせる若殿原わかとのばらは、あ  
はれ何處いづこの誰たが女子むすめぞ、花薰はなかほり月霞つきがせむ宵よの手枕たまくらに、君が  
夢路ゆめぢに入らん人こそ世にも果報はつぱうなる人なれなど、袖そで褻つま引  
合ひてののしり合へるぞ笑止せうしなる。

榮華の夢に昔を忘れ、細太刀の輕さに風雅の銘を打ち  
たる六波羅武士の腸をば一指の舞まわに溶としたる彼の少女の、  
満座まんざの秋波しゅうはに送られて退まかり出でしを此夜の宴はての終として、  
人々思ひ思ひに退出し、中宮もやがて還御くわんぎよあり。跡には  
春の夜の朧月、残り惜おぼげに欄干らんかんの邊はたに蛤はまぐし躡すふも長閑のどけし  
や。

此夜、三條大路さんでうおほぢを左に、御所ごしよの裏手みかの御溝端おほぼたを辿り行